

計画 6-2

第4乳臼歯の“顔”

名取真人（岡山理大・理・基礎理），近藤信太郎（昭和大・歯・第1口腔解剖）

霊長類では、第4乳臼歯は永久歯の大臼歯と形態的にきわめてよく似ている。しかし、直感的ではあるが、遊離歯の歯冠面を見ただけでも、多くは、それが第4乳臼歯とわかる。わたしたちは、直感的に認識している第4乳臼歯と大臼歯の相違を、客観的に表出しようと考えた。

すべての霊長類を対象にすることがむずかしいので、今回は、大型類人猿の歯の研究をこころみた。実際に扱った種類は、ローランドゴリラ、コモンチンパンジー、ピグミーチンパンジー、オランウータンである。ローランドゴリラ、コモンチンパンジー、オランウータンは、霊長類研究所および日本モンキーセンターの標本を使った。ピグミーチンパンジーと一部のコモンチンパンジーは、山田博之博士の所有している資料を使用した。方法としては、歯型をとり、それを計測するやり方をとった。今回は、下顎の歯の分析をおこなったが、計測した項目は、タロニッドの近遠心径、頬舌径、トリゴニッドの近遠心径、頬舌径である。

結果として、種類とは関係なく、トリゴニッドの近遠心径は、第4乳臼歯と大臼歯との間で変わらないが、他の計測項目は、第4乳臼歯の方が第1大臼歯よりも小さくなっていた。

計画 6-3

食性からみたニホンザルにおける歯牙形態の地域変異について

加藤久雄（東京大・理・生物科学・人類）

歯は食物摂取において重要な器官である。ゆえに、この形態と体重などのボディ・サイズにはある一定の関係が想定される。これらの関係の一つ、いわゆる相対的な歯の大きさを検討することで、食物量や質に対するその群の歯の適応を探ることができると考えられる。資料として、高浜・幸島・高宕山・宮島（小豆島産）・勝山群、計5群、164個体の頭骨標本から下顎大臼歯歯冠の近遠心径・近心頬舌径の計6項目を計測した。

まず各群で計測値の平均値を算出した。各大臼歯の近遠心径と近心頬舌径を掛け、それを足し合わせ合計大臼歯面積とした。また、浜田ら（1996）によるこれらの群の体重データを比較に用いた。さらに、面積は2乗根、体重は3乗根で標準化し、線計測値と直接比較できるようにした。標準化体重で標準化大臼歯面積を割った示数（合計面積示数）、第二大臼歯の近遠心径および近心頬舌径を割った示数（近遠心径示数・頬舌径示数）、計3つの示数を算出して各群を比較した。結果として、合計面積示数は0.61から0.74、近遠心径示数は0.39から0.47、頬舌径示数は0.32から0.38の値を示した。各示数とも幸島・高宕山群が大きく、大臼歯が体重に対して相対的に大きい傾向が認められた。高浜・勝山群は中間に位置しており、宮島群は相対的に大臼歯が小さい傾向にある。この示数の種内変異は、ニホンザル種内の大臼歯の大きさ変異とボディ・サイズの変異が単純にアロメトリカルな関係を持たない可能性を示唆する。